

公立小学校での英語活動に関する一考察

池 中 雅 美

はじめに

2000年度5月から、金沢市の公立小学校で民間指導協力員（EAA）として、英語活動に関わる機会が与えられた。金沢市では、平成8年度から市内の全小学校で英語活動が導入された。2002年度から実施予定の「総合的な学習の時間」で扱われる外国語会話を積極的に取り入れていく方針である。ここでは、「総合的な学習の時間」の中で扱われる「国際理解に関する学習の一環としての」英語活動について考える。また、筆者が実際に行った英語活動を通して得られた、今後取り組まなければならない課題について考察する。

1. 「総合的な学習の時間」における国際理解と外国語会話

「総合的な学習の時間」が2002年度から導入されることとなった。小学校学習指導要領において、そのねらいが2点上げられている。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的に、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

また、外国語会話に関しては以下のように記されている。

国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行なうときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行なわれるようにすること。

この「総合的な学習の時間」の導入により、今すでに、公立小学校で行われている英語活動はどのように変わっていくのであろうか。現在、公立小学校で取り組まれている英語活動は、小学校によって活動の回数に幅がある。学期に1回のところもあれば、月2回弱という学校もある。小学校の裁量に任せられているため、今後英語活動を始める学校、回数を増やす学校、あるいは積極的に取り入れないとする学校と多様化していくであろう。しかし、国際化が進み、社会では英語という共通語が不可欠になっている今の時代に、英語活動が広められていくことは間違いないと思われる。

しかし、ここで明確にしなければならないことは、「総合的な学習の時間」における英語活動の位置づけである。小学校学習指導要領においては、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等」という記述となっている。外国語会話は国際理解の一環として扱うことが望ましいようで

ある。つまり、国際理解が主たるねらいであると言えよう。では、国際理解とは何だろうか。自分の国、文化を大切にし、他国の文化を自国のものと比較して、善い、悪いの評価をするのではなく、それをありのまま受け容れられる態度、姿勢があることだと考える。英語という外国語を手段として用い、英語を母語としている国のみでなく、世界の様々な国々また、人々のことを知り、また、日本の文化などについても知らせていけるような人材を育成することが国際理解教育の目的であると思う。

それゆえ、コミュニケーションの手段としての英語を習得することは国際理解を考える上で必要なことである。「総合的な学習の時間」のねらいの一つである、自ら課題を見付け、考え、判断する能力を育てることは、国際社会で生きていく力を養うことにつながると思う。そのために小学校から外国語に触れたり、外国の生活や文化に慣れ親しみ、体験的な活動を通じてその素地を作ることが必要になってくると考える。単に異文化体験として、外国人がいればいいというのではなく、自分の意志を伝えたいと積極的に話し掛けていく態度を養い、それに必要な言語材料を与えていかなければならないと考える。

2. 小学校において実際に行った英語活動

2000年5月からの開始で、11月までで合計6回の英語活動を行なった。生徒達にとっては毎月1回の英語活動となる。1クラス約40名で小学校3年生の1組から3組の3クラスである。1回の活動は40分から45分である。この6回の英語活動の中から、取り上げたゲーム、歌などを中心に述べていく。

(1) ゲーム形式の活動について

英語活動を行なうにあたって、金沢市教育委員会が発行している「英語活動の指針Ⅲ」が民間協力指導員（EAA）に配布された。ゲームのアイデアが資料として載せられていたので、まずこの中からいくつかの活動を選び実践した。

まず、Rainbow greeting game というゲームを行った。始めに色の名前を繰り返し練習した後、生徒一人に同じ色のカードを7枚ずつ配る。生徒は自分の持っている色以外の色紙を持っている生徒と下記のようにあいさつし、じゃんけんをする。

A: Hello. My name is _____.

B: Hello. My name is _____.

A: Nice to meet you.

B: Nice to meet you too.

じゃんけんをし、負けたらその色紙を相手に渡す。それを繰り返し7色集まればOK.、あるいは時間内にたくさん色の種類を集めるというゲームである。色の名前を英語で言えるということと、自分の名前を言ってあいさつができるということを目的に行なった。あいさつも色の名前も簡単に言えることであったようだが、ゲーム形式にすることで予想以上に楽しい雰囲気にな

ったと思う。

How many おはじきというゲームでは、おはじきを一人5個ずつ持たせ、おはじきをいくつか手の中に隠し持ち“How many?”と尋ねる。相手の生徒はいくつおはじきが入っているかを推測して数をあてる。あたればおはじきが一個もらえるというゲームである。“How many?”という問いかけと1から5までの数字については比較的すんなりと発話されていたようであったし、目で見て数を言うだけではなく、推測させるという知的活動が面白さを出していたように思われる。

体の部分の名称をテーマに計画を立てた時には、「Simon Says」、体の部分の絵カードを使ったカルタ取り、福笑いなど様々な活動を行った。中でも福笑いは前に出てやってみたいという生徒が非常に多かった。一人でも多くの子どもに自己表現の場として与えられるよう、もう少し時間と工夫が必要であったと思う。

「英語活動の指針Ⅲ」以外からもゲームのアイデアを得、実践した。食べ物の名前を使ってビンゴゲームを行った。紙に描かれた絵から自分の好きな食べ物を選び、ビンゴシートにその絵を描かせ準備をする。それから、だれか相手を見つけ好きな食べ物を聞き、その食べ物が自分のマスの中にあれば丸をつけていく。たくさんビンゴができるまで続けさせるというゲームである。ビンゴというリスニングの練習と思われがちだが、他の生徒に好きな食べ物が何かを質問するという発信を伴った活動とした。ビンゴゲーム自体が子ども達は好きであるということもあって、ビンゴができると何人もの生徒が喜んで報告に来ていた。

10月には、ハロウィンに出てくる単語を使ってフルーツバスケットを行った。全員が動く時には“Happy Halloween”と言って動くルールとした。異文化の紹介と思ってはいたが、ほとんどの子ども達がハロウィンについては知っていたのには驚いた。

11月にはあいさつすごろくを行なった。“How are you?”という問いに対しては条件反射のように“I’m fine, thank you. How are you?”と答えてしまう子ども達にもう少し別の応答の仕方と思い試みた。しかし、一度定型会話として覚えてしまったパターンからはなかなかぬけられないものであると痛感した。

また、「What time is it, Mr. Wolf ?」というゲームも取り上げてみた。1クラス約40名という大人数で楽しめる活動としては、非常に盛り上がり、子ども達の表情も楽しそうであった。

ゲームというものは楽しいものである。そのゲームという形式の中から英語を学び取っていけるよう配慮したつもりである。英語を使ったゲームが楽しい経験となったのは、子ども達の反応、楽しそうな表情を見てわかることである。

(2) 歌について

歌というのは英語を学習する上で非常に効果的であると考えている。英語独特のリズムを歌に乗せて覚えられるという利点がある。また、楽しさも加わって歌として覚えた言葉は記憶に残る持続性も高いと思われる。

始めに「Hello Song」を導入した。テンポがよく元気が出る歌である。カスタネットを使いリズムをとりながら進めた。始めは小さかった声も毎回同じ「Hello Song」を歌うことによって、だんだんと大きな声で歌えるようになり、輪唱もできるようになった。また、子ども達もこの歌は歌えるという自信につながっていったようである。

他に、数に焦点をあてた時には、「Seven Steps」を選び、動作をつけて歌った。体の部分の名称を扱った時には、「Head, Shoulders, Knees and Toes」を取り入れた。ほとんどの子供たちにとって知っている歌であったが、動作が伴っているので何度しても楽しい活動の一つであるようだった。

9月、10月と「Rain, Rain, Go Away」を導入した。リズムを取るためにカスタネットを用いて復唱させた。9月、10月と行なうことで、2度目は1度目に比べると、より多くの単語を聞き取り、復唱できていた。やはり繰り返し行なうことで、定着が図れることが明確になった。

3. 今後の課題

(1) 一環したカリキュラム

実際にEAAとして英語活動に関わってみて気づいたことは、EAA同士の連絡が全くないことである。前年に何をしてきたのかわからないまま活動をしなければならず、指導案が非常に立てにくかった。語学はやはり、積み重ねが必要である。たとえ、月1回の割合でしか英語に触れることがないにしても以前に行なった活動がどのようなものであったかを知ることによって、同じ題材を扱うにしても、興味を引く活動を工夫することが可能になるのではないだろうか。担任も学年ごとにも変わることも考えると、担当したEAAあるいはALT、または担任が何らかの形で、この子ども達はこの学年のときにどんな活動をしてきたのかという記録を取りながら、英語活動が進められることが望ましいと思う。できることならば、中学校、高校まで一環したカリキュラムの中で英語学習がなされることが必要なのではないかと考える。

(2) EAAの研修

現在、公立小学校で英語活動を行なっているのは、ほとんどがチーム・ティーチングで行われている。指導形態としては、外国語指導助手（ALT）と学級担任、ALTと学級担任と英語専科の教員（JTL）、民間指導協力員（EAA）と学級担任、学級担任とJTL、ALTとJTLなど様々である。筆者は民間指導協力員として学級担任とのチーム・ティーチングで英語活動にあたった。ここで、二つのことを述べておきたい。一つは、学級担任との打ち合わせについてである。チーム・ティーチングで行なう場合には、それぞれの役割分担があるということを認識しておかなければならない。直接会って打ち合わせる時間を持つことが一番よいのであろうが、それが可能でなければ、指導案について連絡をとりあり、どの部分でそれぞれがどのように関わっていくのかを確認して活動に臨むべきであると考えられる。

もう一点は、教師、特に民間指導協力員の研修についてである。中学校や高校の教職免許を持

っていたり、塾や自宅で英語を教えているような民間指導協力員であっても、集団の中での小学生とという子どもに関してあまり知識がない場合、時にはどのように対処すべきか迷うこともあるのではないだろうか。ましてや、月に1回しか英語活動で訪れるのみでは、普段の子ども達の様子は把握しにくい。子どもの年齢に応じた活動の内容を考えていくためにも、子どもの発達、心理などに関する知識が必要であろう。また、民間指導協力員の英語力の向上も含めて、研修が必要であると感じた。

(3) 聞くこと・話すこと

国際社会で生きていく力を養うためには、コミュニケーションが図れるような能力の育成を考えなければならない。そのためには、まず、「聞くこと」、「話すこと」に重点をおいた活動が必要とされる。英語には独特のリズムがある。そのリズムを習得するためには多量のリスニングが必要である。筆者が英語活動を始めた当初は、英語のみで活動を行なってみようと思いましたが、ある子どもの「何を言っているかわからない」という声で英語のみで行なうことをやめてしまった。これには反省点として2つ挙げられる。一つには、もっと簡単な単語を使って繰り返し話すように心がけるべきであったということ、二つ目は、もう少し忍耐強く、子どもが聞くことに慣れるまで待つようにするべきであったということである。

「聞くこと」の大切さと同時に「話すこと」、自己表現をさせることも重要であると考え。自分の考えや思ったことを発表させることは、コミュニケーションを図る上で非常に大切なことであると思う。聞くという受け身の姿勢だけでは、意志の疎通は図れない。能動的に他者と関わる姿勢を持たせるということも重要なことであると考え。

(4) セルフ エスティーム (自尊感情)

日本人は中学校、高校と6年間も学習していても英語を話せない、コミュニケーションをとるのがへただということがよく言われている。中本幹子氏は、このことは「日本人の子ども達のセルフ エスティーム (自尊感情) が低いことに関係しているのではないかと指摘している。セルフ エスティームについては、様々な解釈があるようであるが、中本氏は、「能力と価値の自己概念と肯定的な自己認識」と解釈している。教育の中でどのようにセルフ エスティームをとらえたいのだろうか。2000年11月5日に行われた児童英語教育学会の関西支部研究会において、中本氏の発表で使用された資料には次のように書かれている。「パーキニー (1970) は学業達成に及ぼす子どもの自尊感情の自己成就的予言の効果について論じる中で、好意的な自己イメージを持つことが高い能力や将来の学業達成への期待の認知を導きやすいとしている。」また、中本氏は「クーパー・スミスとフェルドマン (1974) の自己概念、自尊感情を高める教育指導についての基本的な考え方」を取り上げている。その中で「子ども達に学業達成への自信を持たせ、自分自身を肯定的に受容させる」ことが教師の役割であるということが挙げている。成績にこだわらず、ありのままの自分を肯定的に受け容れることが、他者の異なった考えを尊重することになっ

池 中 雅 美

でつながっていくと思われる。これが、国際理解教育の目的にも近づくものであると考える。

実際の英語活動でリズムを強調するためにカスタネットやタンバリンを使用した。リズムにあわせてカスタネットやタンバリンたたくという単純な活動でも皆の前でやってみたいという子どもがたくさんいた。こういった場面で、一人でも多くの子ども達に機会を与え、誉めていくということもこのセルフ エスティームを高めることにつながっているように思う。

4. まとめ

2002年度から「総合的な学習の時間」がスタートするが、英語活動はすでに始まっている。様々な小学校で様々な試みがなされてきたし、今も取り組まれている。これまで研究されてきたことを受け、それを検討しながら、今の小学校での英語活動がさらによいものとなるよう、一民間指導協力員として努力していきたい。小学校において、英語を使って表現する楽しい経験を積み重ねていくことが、中学校へのよいつながりとなると考える。

参考文献

- 石川奈緒美他 (2000) 『英語の歌とゲーム・活動アイデア集』 小学館
影浦 攻編著 (1997) 『小学校英語教育の手引き』 明治図書
金沢市教育委員会 (2000) 英語活動の指針Ⅲ
久埜 百合 (1999) 『こんなふうにはじめてみては 小学校英語』 三省堂
築道 和明 (1997) 『小学校の英語活動』 明治図書
中本 幹子 2000年11月5日 児童英語教育学会 関西支部研究会での資料
和田 稔監修 (1999) 『小学校英語教育 A to Z』 vol.1 開隆堂